短期集中連載

平成の「皇室外交」

唐の時代に建てられた大雁塔を訪れた両陛下＝1992年10月26日

万里の長城「八達嶺」を見学する両陛下＝1992年10月24日

第1回

中国 平成皇室の原点

「中国訪問はよかったと思いますか」

1991（平成3）年の東南アジアから始まった両陛下の海外訪問は19回に及ぶ。各国で市民らと触れあい、友好の橋を築いてきた。お言葉や振る舞いを、当時の関係者の証言を交えながら、「平成皇室」の原点とも言える92（平成4）年の中国訪問からひもといていく。

「池田さんは、中国訪問のときは、いろいろ働いてくれましたね」

2000年5月、天皇、皇后両陛下はオランダを訪問した。日程も終盤に差し掛かったこの日、両陛下はアウデ・ロー離宮にいた。陛下は、朝食をともにする池田維・駐オランダ大使に冒頭のように切り出すと、穏やかだがはっきりとした口調でこう尋ねた。

「中国訪問は、よかったと思いますか」

池田さんが「行って頂いたことはよかったと思います。当時の宮沢（喜一）内閣の決定でした」と答えると、陛下は黙って深くうなずいた。

8年も前の訪中について陛下はなぜ、問いを投げかけたのだろうか。

池田さんの脳裏には、オランダ訪問のわずか1年半前の江沢民・中国国家主席の来日が浮かんだ。陛下の訪中の成功のあと、中国共産党指導部は態度を豹変させた。江主席は、98年の宮中での公式晩餐会で、声高に過去の歴史問題を持ち出し、日本側は中国への不信感を高めたのだ。

「陛下も驚かれたと思う。訪中当時にアジア局長だった私を見て、こうした問いが陛下から発せられたのは、ごく自然な反応だったと思います」（池田さん）

両陛下が中国を訪問したのは92年10月。

それまで中国は繰り返し天皇の訪問を要請し、日中国交正常化20年を迎えた節目にあたる年に実現した。

中国政府が非武装の学生や一般市民を武力弾圧し、多数の死者を出した天安門事件から3年半近くが経っていたが、中国は世界から非難を受け、孤立していた。

外相を務めていた銭其琛元副首相は、訪中の狙いについて「西側の対中制裁を打破する目的があった」と11年後の2003年に出した回顧録『外交十記』で初めて明らかにしている。

訪中が実現するまで国内

世論は揺れた。池田さんがアジア局長に就任したのは1992年7月。宮沢内閣の下、天皇の訪中は固まりかけていた。

「しかし、賛否を巡り国論は分裂。最終的には未定という状況下で、訪中の準備をいかに整えるかが私の最初の仕事でした」(池田さん)

自民党内や右翼からも強固な反対意見が噴出する中、調整役を担ったのが事務方トップで当時官房副長官だった石原信雄さんだった。自民党で反対派の中心は藤尾正行衆院議員だったが、

自民党本部で開かれた訪中反対派の緊急集会

石原さんと藤尾議員は個人的にも親しい間柄だった。石原さんは一計をめぐらす。藤尾議員が尊敬していた福田赳夫元首相に、「天皇陛下の訪中をどう思いますか」と尋ねたのだ。すると、福田元首相はこう答えた。

「中国側が切望しているならば、応えたほうが両国にとっていいのではないか」

石原さんは藤尾議員にそのとおり伝えると、「それは君の言い分だろう」と訝しまれたが、福田元首相に直接確認したのか、納得したようだった。

次は保守派への対応だった。加藤紘一官房長官と石原さんは、衆議院第2議員会館の一室に大東塾の鈴木正男代表と国学院大学日本文化研究所の大原康男教授、高森明勅研究員らを招き、天皇訪中の意義を説明。理解を求めた。

8月中旬には、訪中に賛成、反対双方の有識者計14人を首相官邸に招き、ときには宮沢首相も出席するなか、意見を聴く作業をした。同20日には加藤官房長官が神道政治連盟の会長と都内で会合をした。

「反対論者の方には、その立場や考えがあります。宮沢総理も反対論者に対して理解を得る努力をしないまま見切り発車するのはよくない、という意見でした」(石原さん)

そのうえで、両国にとって有意義な訪問になるのであれば決定したいという方針で、「無理に急ぐことはしなかった」(同)。

当初8月11日に予定していた閣議決定は、25日まで延長された。

目がチカチカしてしまいました

10月23日から5泊6日の日程で始まった天皇、皇后両陛下の中国訪問。両陛下の身辺の安全の確保は両国の重要な課題だった。

石原さんは、政府が治安を完全にコントロールできる中国だから訪問が実現した、と振り返る。一方、前出の池田さんは、治安の面で中国がどこまで協力してくれるかは大きな関心事だった、と述懐する。

「中国サイドは徹底的な警備を約束してくれました。たとえば北京市内から万里の長城のある八達嶺まで約75キロの間は、警官が何メートルか置きに立つ、という徹底ぶりでした」

政府間で決められた訪中の日程では両陛下の身辺の安全を考慮し、市民と直接触れあう場はなかった。そのため唯一、両陛下が市民と心を通じ合えたのは上海訪問の場面だった。陛下の胸中は、訪中を振り返り、詠んだ和歌を見るとよく伝わってくる。

上海
笑顔もて迎へられつつ上海の灯ともる街を車にて行く

「ホワンイン、ホワンイン(歓迎！　歓迎！)」

上海最大の繁華街である南京路。沿道には市民がびっしりと集まり、拍手と歓声が飛び交っていた。

訪中5日目の10月27日。北京から西安、上海へと移動した両陛下は、上海市長の歓迎晩餐会が開かれた新錦江飯店を出た。

前方の人の群れに気づいた美智子さまが、こうつぶやいた。

「ずいぶん人がたくさんいるのですね」

「あの人たちは……」

案内役を務める蓮見義博上海総領事が、

「両陛下を歓迎する市民です」

と答えると、美智子さまは驚いた様子で、「えっ」と声を漏らした。

中国政府が用意した高級車「紅旗」で南京路を走り始める。陛下が右側、美智子さまが左側の市民に向かって笑顔で手を振り続けるが、すぐに陛下は、同乗する蓮見さんにこう求めた。

「もう少しゆっくり走ってください」

国賓の市内視察で中国政府が決めた速度は時速30キロ。速度計が20キロ、15キロと下がっても、陛下は「もっとスピードを落としてください」と繰り返した。

蓮見さんは、両陛下はあの手この手で速度を落とすようお求めになった、と苦笑する。陛下が、

「(市民の)顔が飛ぶように通り過ぎていく」

と残念そうに話せば、美智子さまが、

「わたし、目がチカチカしてしまいました」

と合いの手を入れる。防弾車とはいえ、市民と車との距離は50センチほどにまで近づいている。車窓の目の前に、歓迎する市民の一人ひとりの笑顔が現れる様子は、両陛下が市民と親しく握手をしているように感じたという。

速度計が8キロを指した。車は停止寸前である。押し寄せる人垣から躍り出された小石が車に当たる事態も蓮見さんの頭をよぎった。慌てて「スピードを上げろ」と運転手に叫んだ。

黄浦江沿いの遊歩道に差しかかり、上海市の護衛長の無線からも「スピードを上げろ」と指示が飛ぶ。両陛下が車内灯をつけると、外からもお二人の姿が見えたのか、歓待の声は一段と大きくなった。

陛下が遠くの市民に向かって大きく手を振り、こう続けた。

「外に出られると、いいのですがね」　(つづく)

本誌・永井貴子

天皇家のお正月は大忙し

一般参賀の人たちに手を振る両陛下、皇太子ご夫妻、秋篠宮ご夫妻＝2017年1月2日

天皇家の正月は忙しい。

元日午前5時半。御所にて天皇の「四方拝」が始まる。この祭祀は平安時代初期から続いているとされ、伊勢の神宮や山陵、四方の神々を拝み、国の安寧や五穀豊穣を祈る。静岡福祉大の小田部雄次教授(日本近現代皇室史)によると、最も重要な宮中祭祀の一つであり、天皇の代拝は立てないという。

その後も行事がぎっしりと詰まっている。おせち料理の元祖とも言われ、めでたい膳を神に捧げるために、箸をつけるだけの儀式である「晴御膳の儀」が終わると、「祝賀の儀」へ。松の間、竹の間、鳳凰の間、梅の間と場所を移しながら、皇族や、首相、閣僚、衆参両院議長、最高裁長官、各国の駐在大使公使夫妻らのあいさつを受ける。儀式は午後まで続く。「それぞれのあいさつは立ったままですから、お体への負担も大きく、元日から大変な行事をこなされています」(小田部教授)

正月の食事と言えば雑煮だが、夜の儀式である「入夜御盃」でようやく登場する。宮内庁大膳課にいた故渡辺誠氏の書物によると、餅は和菓子担当がつく。直径約3センチ、厚さ1～2センチの丸餅を三つ、お湯で柔らかくもどし、椀に入れる。鶴に見立てた小芋と亀の甲羅のように切った大根を添え、白みそ仕立てにしている。

2日は一般参賀。天皇の「お出まし」は午前10時10分、午前11時、午前11時50分、午後1時半、午後2時20分の5回。2回目までが両陛下と成年皇族方、3回目からは両陛下、皇太子ご夫妻、秋篠宮ご夫妻と眞子さまが現れる。「滞在時間は5回とも変わりません。ただ、後半になるほど人出が多い傾向にあり、その分、お手ふりをする時間が長いようにも感じます」(皇室ジャーナリスト)

宮内庁によると、2017年の参賀者は9万6700人と、平成以降は1994年の約11万1700人に次ぐ多さだった。18年は皇室を離れる眞子さまの最後の姿を見ようと、前年以上に参賀者が増えることも見込まれる。

3日は皇位の起源を祝し、国家や国民の繁栄を三殿で祈る「元始祭」。4日は皇室の祭祀をつかさどる掌典長が伊勢の神宮と宮中祭事について天皇に説明する「奏事始」。昭和天皇の命日である7日は「昭和天皇祭」。18年1月10日は、明治天皇が学問奨励のために定めたとされる、人文科学や社会科学、自然科学分野の専門家から説明を受ける「講書始」。12日は「歌会始」で、お題は「語」。松の内が過ぎても、休まる暇はない。

短期集中連載

平成の「皇室外交」

第2回 中国・東南アジア 訪中で見せた陛下の〝こだわり〟

国論を二分した1992年の訪中で歓待を受けた天皇、皇后両陛下。側近と日中政府とのひそかな交渉の末に、車は止まるほどに速度を落とし、市民との交わりは実現した。そのこだわりは平成最初の外国訪問となったASEAN諸国で見せた「メッセージ」からもうかがえる。

北京の北海幼稚園を訪問した美智子さま＝1992年10月24日

「外に出られると、いいのですがね」

中国に来たからには市民と触れ合いたい……。陛下の並々ならぬ決心が伝わるひと言だった。

上海の街並み二十数キロを1時間以上かかって車で移動した。上海公安の発表によると、集まった市民は30万人を超えた。当時の橋本恕中国大使は、宮内庁への事前説明で、中国の市民はどのような国賓が来ても沿道に詰めかけず、英国のエリザベス女王が南京路を視察した際も、予定通りの時間で車は走った、と説明していた。

だからこそ、美智子さまは、南京路に集まった人々に驚き、陛下は不可能だと知りながら「降りられないか」と口にしたのだろう。

陛下に長年仕えた元侍従はこのときの様子をこう振り返る。

「私がお仕えした間、両陛下のためにここまで人が集まったのは、国内外すべてにおいて、上海だけだったと記憶しています」

両陛下が西郊賓館に帰着した。上海公安と約束した「時速30キロ」ルールを破り、停止寸前の8キロまで減速したのだ。責められないか、と蓮見義博上海総領事が身構えていると、陛下に仕える手塚英臣侍従の興奮した声が聞こえてきた。

「ありがとう。うまくいってよかったですね」

減速を実現させた2人は顔を見合わせた。1992年8月25日に両陛下の訪中が閣議決定されると、事前準備をする先遣隊として手塚侍従が中国の地を踏んだ。両陛下の最初の訪問地である北京、西安を経て、上海で蓮見さんに切り出した。

「陛下は、ご訪中の機会に、中国の民衆とできるだけ広く触れ合われて日中の友好親善に尽くしたいとの強い意志をお持ちです」

手塚侍従は続けた。

「もし沿道に人が集まることがあれば、ご希望に従って御料車をゆっくり走らせてほしい」

北京や西安にも同様の申し出があったが、警備を理由に断っていた。大使館に相談すれば、結果は目に見えている。さらに、「上海でも、同じように答えるように」といった空気も感じていた。

北京の故宮博物院や長城で出迎えた群衆には政府に選ばれた人もいたし、西安で言葉を交わした学者やスポーツ選手も政府の選出である。全てが決められた行動のなかで、両陛下は一人ひとりと、誠意をもって話し合っていた。

一方で、北京と西安で人々と触れ合えないことに対して、陛下が残念なお気持ちを感じている、との話が流れていた。

蓮見さんは戦時下で育った元軍国少年である。

「中国訪問にかける両陛下の強いご意志を実現して差し上げたいと思い、減速の件を、お引き受けすることにしたのです」

蓮見さんは歓迎責任者の上海正副市長や市の公安当局との信頼関係があったことも背中を押した。「若干のスピード調整はある」と副市長に伝えると、「貴総領事を困らせることはしない」と、好感触を得た。

蓮見さんが苦笑する。

「副市長もせいぜい20キロ程度の減速だと思ったと後に語っていました」

天皇陛下に長く仕えた人物によれば、陛下は「皇室外交」つまり国際親善について、「国と国との関係のもとには、人と人との関係がある」との考えを持っている。それは、同年10月15日に宮殿、石橋の間で行われた記者会見からもうかがうことができる。当時、朝日新聞の宮内庁担当記者を務めた石井勤さんは両陛下のお言葉の中には、「多くの人々と交わり」「人々と会い」といったキーワードがちりばめられていた、と振り返る。

「両陛下の安全の確保は重要事項です。お会いする人や場面は、両政府の下、隙のないほどコントロールされた訪問になることは両陛下とも十分すぎるほど理解されていたはず」

それにもかかわらず、「人と会う」といった表現にこだわりを見せたのは、両陛下が「思いを込めた」のだと、当時も受け止めた。

さらに、国内外で訪中反対の意見があったことへの考えを聞かれ、自身の立場は政府の決定に従うことだとした上で、こう答えた。

「言論の自由は、民主主義社会の原則であります」

石井さんは天安門事件で声をあげる市民を虐殺した中国へのメッセージも含まれていたのでは、と感じた。

象徴天皇である天皇陛下の政治的な行動や発言は憲法に抵触する。

「つまり、両陛下の外国訪問や公務は、何もできない、してはいけないところからスタートするわけです。それは想像を絶するほど大変な作業です」

タイ北部チェンマイの仏教寺院を見学する両陛下＝1991年9月29日

声を出さず胸をトンとたたいて

両陛下は、お言葉や所作、和歌など幅の広い表現でメッセージを伝える努力を欠かさない。

美智子さまも訪問国の国の色や国花を服や帽子のモチーフにするなど、服装にメッセージを込める。

ほとんど知られていないが、訪中時も竹の柄をジャカードの手法で全体に織り込んだドレスを西安の晩さん会でお召しになった。万里の長城では、「香色（こういろ）」という、美智子さまがお好みのピンクとベージュの中間色のジャケットに、ツイードのタイトスカート。一見、なんでもないこの服装にも、中国へのメッセージが込められている。ベルトの彫金のバックルには、古来、中国の人々に愛された牡丹（ぼたん）を模したような花細工が施されていたのだ。

「訪問にあたっては、膨大な量の情報を学び、スケジュールも分刻み。服装や行動は、360度、どの角度から見られるかわからない。準備に忙殺される合間を縫って、そこまでの気遣いをなさるのは、常人では成し得ないことです」（美智子さまを知る関係者）

先の石井さんは、平成初の「皇室外交」となった91年の東南アジア訪問時に見せた美智子さまの姿が印象的だった、と振り返る。

2カ国目のマレーシアで施設を訪ねたときのことだ。美智子さまが高いバルコニーから手を振ると、集まった人たちから歓声があがった。次の瞬間、美智子さまは声を出さず、口を「Thank you」と動かすと、右手でご自身の心臓付近をトンとたたいた。つまり、「心から、ありがとう」の意味だ。

「見事、と表現するしかなかった」（石井さん）

この時期から、「平成の皇室の最大の課題は韓国訪問である」と訪韓を意識する声がチラホラあがってはいたが、平成最初の「皇室外交」は、タイ、マレーシア、インドネシアのASEAN諸国が選ばれた。最初の2カ国は王室を持ち、特にタイ王室と皇室は親密だ。インドネシアも含め、第2次世界大戦時は日本の占領国ではあったが、親日の空気は強く、平和な訪問になった。平成の皇室像を決定づける最初の訪問だけに、宮内庁がこだわって作りあげた日程だったという。

訪中を無事終えた両陛下は、94年の米国訪問で次の山場を迎えることになる。

（つづく）

本誌・永井貴子

写真集 沖縄1935 週刊朝日編集部編 戦前の暮らし、文化、自然を活写 好評発売中 定価1944円（税込み）

短期集中連載

平成の「皇室外交」

第3回 米国

外務省文書に記された「パール・ハーバー」

戦後の皇室の訪米は、日米関係が不安定な中で決行されてきた。1994年、経済摩擦などで両国間が「戦後最悪」と揺れる渦中に、天皇、皇后両陛下が米国に向けて出発。訪米前、真珠湾訪問の報道が駆け巡り、日本国内では反発の声が上がったのだが、その真相はいかなるものだったのか。

「皇室は最強の外交カードであったと思う」

1994年の天皇、皇后両陛下の訪米に携わった元外務省幹部は、当時をそう振り返った。

この年の6月上旬から17日間で約10都市を巡った天皇、皇后両陛下の訪米は、日米関係に戦後最悪と言われた空気が漂う中でのことだった。長年続く米国の対日貿易赤字は、前年には過去最高の593億ドルに達し、ジャパン・バッシングの嵐が吹き荒れていた。

この訪米に同行した岩井克己・元朝日新聞編集委員は、日程の最終日にハワイで、栗山尚一駐米大使が「悪い話ばかりだった日米関係の中で、のどから手が出るくらいほしかった良い話がようやく実現した」と本音を漏らした場面を強く覚えている。

岩井さんは、戦後の天皇や皇太子の訪米は、いずれも日米関係が不安定な時代背景の中で政府によって計画された、と説明する。

「1960年の明仁皇太子と美智子妃の訪米は、安保反対運動によりアイゼンハワー大統領の訪日が中止となった危機的状況の直後。75年の昭和天皇の訪米も、ニクソンショックで日米関係が冷え込む中、田中角栄内閣が計画をした」

昭和の終盤、明仁皇太子ご夫妻の87年の2度目の訪米は、日米貿易摩擦により反日感情が渦巻く最中であった。昭和天皇の闘病も重なったが、日程を短縮してまでも強行された。

政府専用機でワシントン郊外のアンドリュース米空軍基地に到着した両陛下＝1994年6月11日

平成の世に移っても、貿易摩擦は暗い影を引きずり続け、クリントン新大統領は、「対日強硬姿勢」を打ち出して当選した。94年の訪米は、それから間もない時期だった。

ただ一方で、クリントン政権は初めて迎える国賓として手厚い接遇につとめ、ホワイトハウスでの歓迎式典はCNNで中継された。

「両陛下の人柄に触れた大統領夫妻は、退任後も交流を続けている。この訪米は親善という最大の目的を果たしたと思います」（当時の宮内庁職員）

歓迎晩餐（ばんさん）会では、美智子さまは装いを通して日本の伝統文化の伝達者としての役目を担った。

相手が王室ではなかったため、着用したのはイブニングドレス。厚みを持たせるために、絹とウールを混紡した川島織物の白いドレスに、佐賀錦の技法を用いた金糸で花が描かれていた。美智子さまと交流のある人物がこう話す。

「皇后さまのお母さまである正田富美子さんは、佐賀県に縁のある方でした。デザイナーの植田いつ子さんのもとで、土地の伝統技法である佐賀錦を洋装に取り入れたのも、そうしたお気持ちがあったのでしょう」

その美智子さまだが、体調は万全ではなかった。前年の10月20日。誕生日の朝に倒れて声を失った。それでも公務に姿を見せ、筆談で相手と気持ちを交わした。

年が明け、訪米出発前には、ゆっくりと小さな声で記者会見に臨むなど、なんとか公務や儀式をこなしていた。

大統領夫妻の温かい接遇、屈託のない米国市民の歓迎の中で転機が訪れた。日程も半ばを過ぎた6月19日。ロッキー山脈の国立公園を見学していた両陛下が、車から降りて高山植物を眺めていたときのことだった。ふいに陛下が車に駆け戻り、自身のカメラを取り出した。陛下は高原にしゃがみ込んで、自然保護レンジャーの米人女性と花を見ながら楽しそうに語らう「妻」に向かい何度もシャッターを切った。

「保守派からの平成皇室バッシングで倒れた皇后さまが、長く暗いトンネルを抜けてようやく快復した瞬間でした。これはビッグニュースだ、と思った私は、当局と記者クラブの取材協定に触れる可能性を思いながらも、夢中になって両陛下の姿を望遠レンズで撮影したのです」（岩井さん）

そして6月23日、最終訪問地ハワイに到着。翌24日には国立太平洋記念墓地（パンチボール）に献花した。

ハワイ訪問を巡っては、先の中国訪問のように日本国内で反発が起きていた。閣議決定を4日後に控えた3月14日、読売新聞が「両陛下、ハワイで真珠湾を訪問へ」と一報を打つと他紙も続いた。当時の中日新聞には、〈外務省が内部的に作成した日程表によると6月23日午前の欄をみるとはっきりと「パール・ハーバー」と記されている〉とある。しかしすぐに国内の保守派が反発。最終的に真珠湾訪問は見送られた。

なぜひっくり返ったのか。元外務省幹部は、その理由を、こう説明してくれた。

国立太平洋記念墓地で、供花し黙礼する天皇陛下＝1994年6月24日

担当の外務省北米局がいくつもの訪問先をピックアップしたひとつに、日本の大使級の人物がハワイを訪れる定番コースだった真珠湾に浮かぶアリゾナ記念館を入れたのだろう、と。

脆弱な土台に立った平成皇室

すぐに候補地からは外れたが、沖縄戦終結の日である「6月23日」と報じられたことで議論はヒートアップし、保守派はさらに反発を強めた。当時、羽田内閣で官房副長官を務めた石原信雄氏は、「真珠湾訪問の議論が官邸で公式にあった記憶はない」と断った上で、「天皇の真珠湾訪問情報」はしょっちゅう耳にしたと話す。

「情報が流れる根底には、天皇陛下の真珠湾訪問が日米間の友好親善を促進するうえで有益だと信じる人たちの存在があります」

真珠湾攻撃は日本側の開戦通告の遅れから「日本軍のだまし討ちだ」「いや、そうではない」という議論に、いまだに決着がついていない。そんな複雑な事情を抱える場所だけに、「天皇陛下が訪問すれば、『日本がだまし討ちを認め、謝罪した』と日米両国はもちろん、国際社会でも受け止められる」（石原氏）。

実際、米ワシントン・ポスト紙は「謝罪」と解釈。〈訪問の意図は大戦のきっかけとなった攻撃を、米国に対してわびる気持ちを示すことであった。2国間の過去の苦い歴史を和らげることを目的としている〉（94年6月11日付）

このとき外務事務次官だった斉藤邦彦元駐米大使も、自身が次官になった93年ごろには、両陛下には近いうちに米国に行っていただこう、という話は省内で存在したと認めつつ、「真珠湾訪問は議論された」と振り返る。「ただ米国から行ってほしいという強い要請はなかったと記憶している。宮内庁からも、両陛下がそのように要望されているとは伝わってこなかった」

そもそもパール・ハーバーは日本の奇襲攻撃の象徴。その地への訪問は、犠牲者の魂に祈りを捧げる趣旨とは異なるのでは、と斉藤元駐米大使は疑問を抱く。

今でこそ、平成皇室のキーワードは「祈り」であり、戦争の傷痕が残る外国への訪問は「慰霊と和解の旅」の色合いも定着している。だが、平成が始まってわずか6年という歳月では、明確な皇室像は固まっていなかった。さらに、昭和の皇室を懐かしむ保守派からの反発は強く、雑誌には皇室を批判する記事が並んだ。平成の皇室はまだ脆弱（ぜいじゃく）な土台に立っていた。（つづく）

本誌・永井貴子

短期集中連載

平成の「皇室外交」

第4回 英国 元捕虜の憎しみと悲しみ

平成の皇室が10年目に差しかかる1998年の英国訪問は、戦争の傷痕と対面する旅となった。旧日本軍の元捕虜団体は、両陛下の馬車に背を向け、シュプレヒコールを浴びせる。癒えることのない心の傷から噴き出す憎しみと悲しみ。両陛下は何を思い、彼らと向き合ったのだろうか。

両陛下主催の答礼晩餐会に臨むエリザベス女王＝1998年5月28日

1998年5月26日。雨があがったロンドンの大通りザ・マル。バッキンガム宮殿に続く800㍍の沿道は、天皇、皇后両陛下のパレードを待つ日英市民らで埋め尽くされた。

馬車が見えてきた。先頭はエリザベス女王と天皇陛下、2台目の馬車には夫のフィリップ殿下と皇后美智子さまが乗り、周りを警護する大勢の近衛騎馬隊。

式部官長だった苅田吉夫さんは、後方に続く随行の馬車に乗っていた。

ほどなく沿道の奥に、背中を向けてズラリと整列した集団が苅田さんの目に入った。第2次世界大戦の東南アジア戦線で旧日本軍の捕虜となり虐待を受けた退役軍人たちである。この日、元軍人とその家族らが英国中から集まっていた。

背を向けた姿は抗議を意味していた。苅田さんの耳には届かなかったが、彼らは口笛で「クワイ河マーチ」を吹いていた。捕虜収容所で強制労働を強いられる連合軍兵士とタイのクワイ河への鉄橋建設をめぐる悲劇を描いた映画「戦場にかける橋」のテーマ曲である。

「懺悔せよ」と叫ぶ老人や「日本軍の捕虜」と記したたすきをかけた元軍人もいた。このパレードで、元捕虜のジャック・カプラン氏が日章旗を燃やしている。

両陛下は前日の夜に英国に到着。1週間に及ぶ日程は、この日のホース・ガーズ（近衛騎馬隊司令部閲兵場）での歓迎式典で幕をあけたばかりだった。

「これ以上、抗議が大きくならないでほしい」

苅田さんは、祈るように馬車から元捕虜の背中を見つめていたが、宮殿に近づくにつれ、周囲は歓迎の和やかな空気に包まれ、胸をなでおろした。

皇室と英国は長きにわたり親密な関係を築いてきた。昭和天皇は青年時代、英国でジョージ5世の薫陶を受け、現在の天皇陛下も53年にエリザベス女王の戴冠式に参列した。皇太子さま、秋篠宮さま、そして現在留学中の佳子さまなど、戦後に成人した皇族の多くは、英国留学を経験している。

だが、両陛下の訪英が実現したのは、平成が始まって10年目のことだった。

「英国との親密度を考えれば、訪問はもう少し早く実現してもよかったかもしれない。ですが、下地を整えるのに時間が必要だったのではないでしょうか」（苅田さん）。戦後50年の節目である95年ごろから、英国では元捕虜団体が日本に対して補償と謝罪を求める声が高まっていた。

このときの林貞行・駐英大使は、こう振り返る。

「少なくとも前任者の時期から、日本の民間団体とも協力して、和解への努力を続けてきました。だが、アジア各地の劣悪な環境の下で長期にわたり強制労働をさせられた元捕虜のほかに、収容所には女性や子供も含む民間人もいました。心の傷は簡単に癒えるものではなかったのです」

両陛下の訪英直前まで、両国トップは、不測の事態を招かないよう、手を尽くした。英大衆紙「サン」に捕虜の扱いを謝罪する橋本龍太郎首相の寄稿文が掲載され、両国首相の会談で協力を確認。だが、多くの英国紙には捕虜問題を訴える記事が並び、一部大衆紙は「ジャップ」と批判した。

英国政府から元捕虜やその家族らに1人あたり1万㌦（約200万円）の補償金が支給されたのは、2年後の2000年である。先の林元大使が振り返る。

「彼らは天皇訪英が補償や謝罪に向けてアピールする最後の機会だと考えていたこともあり、抗議をしないわけにはいかないとの気持ちもあったのでしょう」

林元大使は、英国側を通じて当日の動きを把握していた。パレードの日の朝、両陛下と渡辺允侍従長との朝食の場で、

「デモはしませんが、背を向けた抗議行動はするようです」

と報告した。陛下は黙ってうなずいたという。

馬車に背を向ける元捕虜たち＝1998年5月26日

陛下の胸中は、この夜の晩餐会で述べた「お言葉」に凝縮されている。

〈戦争により人々の受けた傷を思う時、深い心の痛みを覚えますが、（略）私どもはこうしたことを心にとどめ、滞在の日々を過ごしたいと思っています〉

林元大使が、強く記憶に残る場面がある。パレードの後、両陛下は無名戦士の墓があるウエストミンスター寺院を訪れた。寺院に到着した両陛下が車から降りると、道を挟んで元捕虜らがズラリと立っていた。あっ、と思った林元大使は、急ぎ陛下に伝えた。

「陛下、どうぞ建物にお入りになってください」

だが、陛下は立ち止まって動かない。道を挟み、元捕虜らとじっと向き合っていた。美智子さまも陛下の傍らに寄り添った。

わずか数十秒のことだったが、林元大使は、緊張感に押しつぶされるほどの長い時間に思えた。建物に入った両陛下は、無名戦士の墓に花と祈りを捧げた。

染み入るように伝わる国際親善

寺院を出発する両陛下に「エンペラー、ノット・カム！」とシュプレヒコールを繰り返した元捕虜団体だったが、後日談がある。天皇が見てくれたことで自分たちの気持ちをわかってくれたと感じた、とメンバーはのちに吐露したという。

外交官とも政治家とも違う。水が染み入るように、じんわりと伝わるものがある。これが皇室の国際親善か――。林元大使はそう感じた。

両陛下は英国滞在後、デンマークを訪れる。このときの折田正樹駐デンマーク大使は、陛下が英国での体験を振り返り、

「あのように心の傷を受けた方々が、まだ多くいるのですね」

と漏らした言葉を、側近らから伝え聞いた。

折田駐デンマーク大使は、林元大使の後を受けて駐英大使となる。そして日章旗を焼いたカプラン氏はその後、日英の橋渡しを続けた在英の恵子・ホームズさんが主催する旅で02年に来日している。日本政府による謝罪と補償を生涯訴え続けたが、「日本を許す」と話した。ホームズさんの活動を支えた折田さんのもとにもカプラン氏から手紙が届いた。古いタイプライターで打たれた便箋には、「広島、長崎を見て日本も戦争の犠牲者だと知った。反日主義を放棄したい。残りの人生は長くはないが、日本と英国の友好のために尽くしたい」とあった。

04年に英国大使離任に伴う皇居でのお茶会で、カプラン氏のことを伝えた。

両陛下はうれしそうな表情で、こう語ったという。

「みなさんそこまでやってくれましたか。ありがとう」

捕虜問題は、十重二十重に複雑だ。この問題を研究する中尾知代・岡山大学大学院准教授は、来日したことで英国の元捕虜団体の仲間から孤立した元軍人もいたと、リポートで指摘している。

美談で終わらない事実も中にはあった。それでも両陛下はひたすらに足を運び人々に会い、対話を続ける道を選んだ。（つづく）

本誌・永井貴子

短期集中連載

平成の「皇室外交」

第5回（最終回）

オランダ 反日感情残る広場にて

1940年代初めに日本をABCD包囲網で囲んだ4カ国のうち、昭和天皇の公式訪問がかなわなかったのが中国、そしてオランダだ。平成に入り、天皇、皇后両陛下は中国、米国、英国と訪れ、2000年には反日感情が根強く残るオランダの地を踏んだ。

戦没者記念碑で黙禱する両陛下＝2000年5月23日

2000年5月23日。宮内庁の式部官長としてアムステルダムのダム広場にいた苅田吉夫さんは、固唾（かたず）をのんで見守っていた。

宮殿正面からダム広場まで歩く天皇陛下と皇后美智子さま。両脇を守るようにエスコートするのは、オランダのベアトリックス女王とコック首相、アムステルダム市長らだ。視線の先にあるのは、広場中央に立つ第2次世界大戦の犠牲者の戦没者記念碑である。

ダム広場をぐるりと取り囲むビル群には、およそ2千の窓がある。窓から妨害が起きてもおかしくはない状況の中、献花を行う両陛下の両側では、捧げ銃の兵士がデモや暴動に備えてずらりと整列していた。

「女王陛下が国賓と献花台に進まれるのは異例のことで、この提案は女王自らなされたと聞いています。国民から深く敬愛される女王陛下のご訪問を成功させようとの並々ならぬご配慮を感じました」（苅田さん）

オランダの女王は国民への大きな影響力を持っていた。女王による「盾」、そして陛下の後方を守るように、子どもの頃インドネシアの収容所にいたハウザー元将軍らを両陛下の献花式のエスコートとして加えたのは、国民へのメッセージである。

両陛下が黙禱（もくとう）を捧げる間、ダム広場は時間が止まったような静寂に包まれた。女王も相当な緊張下にあったのだろう。献花式が無事に終わり、歩いて宮殿に戻る間、そばにいた池田維（たもつ）オランダ大使に、

「献花がどれほど長く感じられたことか。無事に終わってほっとしました」

そう、つぶやいた。

オランダの帆船「リーフデ号」が日本に漂着したのが1600年。日蘭交流400年の節目の年に、オランダ訪問は実現した。経済面で日本とより強固な関係を望むオランダは、両陛下の訪問を望んでいた。

小児身体障害者施設で女の子に話しかける美智子さま＝2000年5月24日

もうひとつ、「負の遺産」への区切りをつけたい、という目的もあった。旧日本軍の元捕虜団体の存在は、2年前に訪問した英国も同じだが、オランダはより複雑だ。旧日本軍が捕虜とした英国人は、東南アジア戦線に赴いた兵士が大半。一方、数百年にわたりインドネシアを植民地としたオランダは、戦争捕虜となった4万人の兵士に加え、9万人の民間人が収容所に入れられた。慰安婦として働かされたと訴える女性らもいる。

両陛下の訪問をオランダ大使として取り仕切った池田さんはこう振り返る。

「彼らはオランダに帰国しても、『植民地主義者』として冷たい視線を浴びせられ、政府からの補償金もわずかでした。そうした事情も反日感情をより高ぶらせていたのです」

1956年に結んだ議定書などに基づき、日本がオランダ側に支払った見舞金は、1人当たりで約4万円（当時）にすぎない。

71年に昭和天皇が非公式に訪問した際は、昭和天皇と香淳皇后が乗った自動車に魔法瓶が投げつけられ、レセプション会場では「ヒロヒト帰れ」とプラカードを掲げたデモ隊に囲まれた。女王による87年の訪日計画は、国内の激しい反対で中止。王室は昭和天皇の崩御に伴う大喪の礼も欠席した。

実は、両陛下のオランダ訪問直前まで、日本政府や外務省は、大規模なデモなどに備える「隠密計画」を練っていた。外務省職員が隣国のベルギーに待機し、非常事態にはオランダで現地の知人らと「このデモはオランダ全体の気持ちを代表するものではない」と記者会見する案すらあった。

両陛下が供花する会場近くで、日本政府に謝罪と補償を求めて外国人居住登録宣誓証明書を掲げる男性＝2000年5月23日

「計画がオランダの新聞に報道されでもしたら、火に油を注ぐ結果になりかねない。外務省に反対意見を述べました」（池田さん）

96年に大使に着任した池田さんは、時間をかけて戦争被害者たちとの関係を築きあげた。女王も、国内の地ならしを買って出た。日本政府を相手に賠償請求を起こす団体の会長を王宮に招き、話に耳を傾けた。

それでも、ダム広場での献花の翌日は、首相府前で戦争被害者ら約150人がコック首相主催の昼食会に出席する両陛下を待ち受け、両陛下の車にブーイングを浴びせた。両陛下の滞在中は、小規模なデモが各地で発生していた。

次の訪問国、スウェーデンで公使を務めた多賀敏行さんが回想する。

「両陛下がオランダに滞在される間、現地の日本大使館から私の居た在スウェーデン日本大使館へこうした状況を知らせる電報が届きました。ご苦労されているのだなあと思ったことを覚えています」

女王から届いた一通の手紙

緊張が続く訪問中、女王はまさに全身全霊をかけて両陛下を守った。女王の夫、クラウス殿下はドイツ人。結婚は、当時大きな議論になった。そうした女王だけに、戦後処理の難しさを誰よりも知り尽くしていた。

女王の苦悩を垣間見るような場面がある。オランダ大使に任命された池田さんは皇居に参内した。両陛下とのお茶会の席で、侍従が池田さんの前に一通の手紙を持ってきた。

「女王が両陛下に宛てた手紙でした。そこには、国内の反対により、昭和天皇の大喪の礼に出席できなかった事情が丁寧につづられていました」（池田さん）

この訪問で、最終的にオランダ国内の空気を変えたのは、両陛下と同国民との触れ合いだった。訪問3日目、ライデン大学を訪れたときのことだ。先の、苅田元式部官長が振り返る。

「学生たちが、両陛下を歓迎する日本語の垂れ幕を窓に掲げていました。両陛下が構内を歩いていると、学生寮の窓から女学生が身を乗り出していた。すると、両陛下がすっと近寄って話しかけ、日本語で歓談の輪ができたのです」

学生とおしゃべりのひとときを、そして障害児施設で子どもを抱き上げてほおずりする美智子さまの写真は現地紙に大きく掲載され、好意的な論調が並んだ。

オランダ訪問はおおむね成功、との空気が両国に漂った。翌朝は滞在最終日。

アウデ・ロー離宮で朝食をともにする大使の池田さんに、「中国訪問のときはいろいろ働いてくれましたね」、そう声をかけた陛下は、もう一度、池田さんに話しかけた。

「（わたしの）中国訪問はよかったと思いますか」

1940年代初め、日本はABCD包囲網による経済封鎖で追い詰められ、開戦に踏み切ったとされる。

平成の両陛下はそのうち、92年にC（中国）、94年のA（米国）、そして98年にはB（英国）の訪問を果たした。

最後のD（オランダ）訪問という大きな壁を乗り越えた直後の、平成の天皇陛下の問いかけだった。（了）

本誌・永井貴子